から猫云々—宋雀院の御女三の宮の猫が牝猫に呼ばれたる縁にて柏木と契る（源氏若菜）から打—猫を懸ぐ唐打の紐附綱にて簿問き女三宮の姿見えたる縁より云ふ　春をもつて—名の以春なればいふ　大經師—表具師にて暦の製造を預る　どうぶくら—眞中　清華—大臣となるべき家柄　十德—狩衣に似たもの僧體の者の着る服

おさん茂兵衛戀八卦柱暦（大經師昔暦）

作者　近松門左衛門

歌　から猫が男猫よぶとて、薄化粧するはしほらしや。猫さへも夫のへ忍ぶに、我身は何とから打の、エイソリヤ　綱よりとけぬ契りぞや。じやれてそばへて手鞠とれく。ま一つふたつ、みつ四ついつむつなゝつる八つる、こゝのほんほとおんゑ、ゑいころ〳〵〳〵、ころり火燵にしなだれて、なつくもをのが戀ならん。それは昔の女三の宮、是はおさんの當世女、おつとの名さへ春をもつては色香に鳴、梅の暦の根本大經師以春とて、袴いらずの長ばをり、家居も京のどうぶくら、諸役御免の門作り、名だかき四條烏丸。既に貞享元年きのへ子の十一月朔日、來る丑の初こよみ、今日よりひろむる古例に任せ、あるじ以春は未明より、禁裡院中親王家、五攝家清華の御所方へ、新暦を獻上し、方々のめでた酒、嘉例の如く去年の如く、十德著ながら火燵にとんと高いびき。算用場には手代共、進上暦の牧包、江戸大阪のくだし暦、地うり子共の取さばき、一門振廻祝義の使、籠の霞鱠の雪、春めき渡る摺鉢の音、今日の霜月朔日を、元日とこそ祝ひけれ。

おも手代助右衛門、此家のたばね綿の小紋の羽織、主も心をおくしまの、袴もと渡りの昆布の皮、こはばつたる顔付にて、助ヤ旦那はまだおやすみか。夜の中から方々の勤、くたびれはお道理。申おさん樣、茂兵衛めが戻つたら、かはらふと存ずれど、どこにのらをかはくやら、二條むきお屋敷方の、進上暦がおそなはる、一息に廻つて來ませう。嘉例の通り御一門衆お出なされう。御臺所か姫君の樣に、猫ちやうらかしてござつてもすまぬ事。これ玉、同じ樣にそれなんじや。奥の臺子もしかきや。庭の小座敷も掃除しや。こたつに火をいりや。違棚のほこり拂ふて、すご六ばん將棋盤、ごいしの數もよんで見て、手水鉢に水入させ手拭もかけかや。たばこ盆に切炭いけて、膳立をして椀ふいて、お給仕にさしあはふ、夕めしはやふ食てしまや」と、一口に千色程、「まだめんどうな其猫め、ぎやあ〳〵とほへるが能で、鼠一疋取はせず。おねこ見てはぴろ〳〵と、屋根も垣もたまらぬ。重てやねでさかつたら、四つ足くよつて西の洞院へながしてくりよ」と、なんの掛も構もなき、ねこに迄しぶ口の、茶の間中の間すみ〳〵見廻し、旦「それ久三挾箱、暦くばる家に寄つてお引が出る、只取と思ふな給分に引つぐ、ことはつて置たぞ」と、打つれ表に出にけり。おさん玉が顔見合せ、「なんと今のを聞やつたか。同じ物

たばね—家の紋　挿りと東錦と掛く　東錦—心を置くにかく、殘留綿の事　と渡り船來　昆布の皮—厚き形容のち云々—なまけるちやうらかす—嘲弄すしかきや—仕掛上かけかや—かけかへよさしあはふ—間に合ふ　給分云々—祝儀も給金の中に算入すゝ

肝いつて―世話して

ぶとうな―ごつごつした

濡かけ―戀しかけ

の云様で、茂兵衛の様に物やはらかにいふても事は調ふ。あの人も氣に如在はなさそふなが、ぢたいの顔が憎躰に、慳貪に見へるゆへ、詞もあいそがなさそうな。何と助右衛門男にほしいか。肝いつてやらふか」玉「エヽおさん様いやらしい事仰しやんすな。あんな男持ふより、牛につかれたがまし。同じ手代衆の内でも、茂兵衛どのゝ様な、かりそめに物云も、あいそらしうて、いつ腹立顔も見せず。ほんにあの様な男持をなごは果報でござんす」さん「ほんに云やればそうじや。猫にも人にも合縁奇えん、隣の紅粉屋の赤猫は、見かけからやさしう、此三毛をよび出すも、聲をほそめて恥しそうに見へて、こいつが男にしてやりたい。又向の練物屋の灰毛猫は、憎らしいぶとうな形で、遠慮會釋もなふ、屋根の上を馬せめる様に、怖い聲して此三毛をよび出す。先度も下立賣のかゝ様と、親子たつた二人ゐる縁先の藏の屋根で、此三毛をかはいけに、それは見られた事かいの。あんまりにくさに棹竹持て追たれば、おれを睨んだ目元の怖さ。こりや三毛よ、わるい男持なよ。灰毛猫が濡れかけたら、一度が大事ふつてのけ。此さんが從者聟、よい男猫添そゞゑ。ヲヽかわいや」と猫なで聲。にやん〳〵あまへる女猫の聲、もれてやよそに妻戀の、男猫の聲々、三毛はこがれてかけ出る。さん「ヤイいたづらもの、大勢男猫の

聚田口―刑場

祝日―祝に言ふをかく

一度が定―一度あれば今度こそしと也

鎌足云々―海人が鎌足の爲に海底に沈み劍にて乳下を割き玉を奪めて歸りし事（謠曲海士と大織冠）

聲がする。あの中へいて何とする。エヽ氣の多い奴じやな。こりや男持なら、たつた一人持物じや。間男すれば磔刑にかゝる。女子のたしなみしらぬか」と、だきすくめても爪立て、搔つくをあいたしこ。放せば離れてかけ出る。「ヤヽ間男しのいたづら者、粟田口へいきたいな」と、後の我身を魂が、さきにしらせて祝日に、追かけ奥に入ければ、玉もつどいて立所を、以春むく〳〵起あがり、後だきにひつたりと、乳「サアうつくしい女猫捕へた」と、乳のあたりへ手をやれば、玉「アヽこそばあ。またしては〳〵、だきついたり手をしめたり、一度がぢやう。おさん樣につけて、どこもかしこも紫色に成程つめらせます。アヽうるさや」とふり放す。乳「どつこいやらぬ。本妻の惜氣と鰮鮑に胡椒はお定り、なんとも存ぜぬ。紫色はおろか、身中が樺茶色に成とても、君ゆへならば厭はぬ。むごいぞゑ〳〵、毎晩々々寢込にお見廻申せ共、一度も本望とげさせぬ。我ゆへに此以春、名をかへて鎌足の大臣。玉をとる思案ばつかり。今夜こそいやといはさぬ一つの利劍をぬき持て、彼海底に飛入ぞ。應か〳〵」とだきしむる。玉「どふ成とさしやんせ、こちやおさん樣にいふ程に。あれおさん樣〳〵」乳「やれやかましい。其外おさん鰐の口、口のついでに口々」と、顏をよすれば門口より、「賴みませう」と、臺にすへたる

おさん鰐の二―海人の母が鰐にとられしよりおさんも鰐にとられたと酒落たり口々―接吻

鰐蛸、玉「あれお客が有退しやんせ」与「いや大事ない。蛸持参は女中客」と、いふ所へかご乗物、下立賣のお袋様、お出の由を案内す。与「なむ三寶しうとめの古蛸、是はならぬ」と云捨て、逃て奥にぞかけ入ける。程なくかごをかきいるれば、おさん端迄出むかひ、「かゝ様よふござんした。とつ様はなぜおそい」母「さればいのとつさまは、おとゝひ花の本の連歌の會に夜をふかし、少風氣の有うへに、風早宰相様の朝茶の湯、彌風を引そへ、それでゐござらぬ。先々けふは毎年かはらぬ初暦、商賣繁昌めでたい〳〵。以春殿はどこにぞ、悦びであらふの」さん「推量して下さんせ。御所方方々御嘉例の九獻に醉ふて、裏の數寄屋にねていられます。サア先奥へござんせ。りんやはつお供太義じや。晩にはこちから送らせましよ。六尺共往なしやや」と、親子伴ひ入にけり。泰公を出過ぬ氣立傍輩の、下手につくも我からの、茂兵衛は早天より、暦くばりてさき〳〵の、びん美酒の麴の花、ちろ〳〵目にて立歸り、「あるいた事かな、七介やすみや。御一門衆お出なら、すぐに袴も著てゐて、爰で一ぷくたのしみ煙管、さらば醉をさまさうか」と、しばしくつろぎやすみしが、火燵の間より「是茂兵衛、爰へおじや」とよぶこゑはおさん様。はつとゐなをり、玉「たつた今歸り、少し酒氣もござれ共、若急な御用もや」とい

六尺―駕昇

我からの―藻に住む蟲のわれからの歌をとる

ひければ、さん「さぞくたびれでは有ふが、急に咄す事が有。爰へ〳〵」と、膝もと近く小聲に成「とつ樣の方に面倒な事ができて來て、談合したいといふ事。恥をいはねば理が聞えず、知やる通りの御身體、下立賣の居屋敷を、町衆の加判で、おとゝし三十貫目の家質に入れたげな。それでも昔の株の家、物入つゞいて此春又町へもかくし、内證で八貫めの質に入たを、前の銀方が聞付、それとはなしに此月の三日限に、家渡すか銀立るか、返事次第に五日には目安あげる、と足もとから鳥の立樣に、俄に町へ屆たといの。いとしや、とつ樣の家渡すも大事ない。日安付るもかまはぬが、家一間を兩方へ、質に入たが顯ては、此岐阜屋道順が一ぶんがすたるとて、ほろ〳〵泣てござるげな。それで色々扱ひて此三日迄に、二貫百目の利をやつて、事はすむに極つて、其上で銀がない。漸〳〵と一貫目は黑谷のお寺で借出し、まあ一貫目が打てもみしやいでもないといの。以春樣にいふたらば、つい埒は明けれど、とつ樣もかゝ樣も、聟に無心云ひかけては、大事の息女にひけが付　とお年寄の我がつよく　以春樣へは鼻息も知らす事が叶はぬ。助右衞門にいふたらば、又例のしかみ顏　眉合に皺よせて、其足で以春樣にいふは定。我夫をさしおいて、手代にいふは何事、と結句物に尾鰭が付、此月末には去御公家衆の御

御身體―御身代
加判―連判
銀方―人貸した人
足もとから云々―俄の催促に云ふ諺
目が付る―訴訟する
一間―一軒
ひけ―負け
尾鰭云々―枝葉が出來て面倒になる

知行納り、三十兩戻る金が有、是はおれもしつてゐる。二十日程の間のこと、頼むはそなた計。壹貫め調へて、親達の苦をはらしてたも。エヽ無念な、男の身ならば、是式に親達に苦はかけまい。娘生んだ親も損、女ごに生れた身も因果」と、しみ〴〵くどき頼みける。茂兵衛も一盃きげん、「はれやれ姫御前と申者はお氣がはそい。五十貫百貫めでも有ことか。仰山そうにそれ程の銀、ぐど〳〵おつしやる事かいの。旦那の印判一つ間屋へ持て參れば、江戸爲替二貫めや三貫目、常住取やりいたします。物ならたつた二十日の間、お氣遣なされますな。けふの内一貫め、急度調へ進じませう。私が少しの間、横道いたせば事がすむ、といふて盗するでもなく、人の目をかすめる事。よし盗すればとて、身の欲に付ぬは天道が明なり。おまへとてもお主、親の恥は娘の恥舅の恥は聟の恥、ふたりの主の恥をすゝぐは、畢竟お主の奉公。落ついて奥へござりませ」さん「アヽ嬉しい〳〵。物はいふて見よふ物。かゝさまにもさゝやいて、お心をやすめう。そなたに任せた頼むぞや。こりやおなご共、お料理がよくば早ふお膳出しませ」と、いさみて奥に入にけり。茂兵衛とつくと思案を極め、他人さへ頼まるゝ、つまる所が主のため。たとへしわざは曲る共、心はさつぱり、ぬぐひ漆の刀かけ、主人以春の巾著を、明て奪ふ

横道―曲つた事をする

他人さへ云々―況や主從なれば吾々を見込で頼まるゝ筈さつぱり云々―

心の奇麗と刀かけの奇麗とかく明けて奪ふ云々―刀かけの巾着を盗みて中の紫殷沙包より印を取出す、論語陽貨篇に惡紫之奪朱とあるを句を取る　白紙―しらずに　印板―印板を目ねぶる―知らざる風をする

も紫ふくさ、印判そつと取出し、いつの間にかは助右衛門、戻つて後に有ぞとは、見ず白紙を押ひろげ、茂「文言銀目は跡にも書け。先印判お」としつかとおす。背に目のなきうたてさよ。助「茂兵衛それ何する」と、聲かけられてびつくりせしが、茂「ハア、助右衛門か。天道は恐ろしい、見付られてのけた。壹貫目程入用有つて、旦那の名代で銀をかる。此月中にあてが有。二十日程の間、目ねぶつてたもるか。そなたの氣では傍輩の首切らるゝもいとふまい。茂兵衛が科は極つた。くゝり成と殺し成と勝手にしや」とな げ出す。助「ヲヽいきずりめ勝手にせいでおかふか。男共皆おじや。旦那お出なされ」とよばはれば、家内の上下何事やらんと立さはぐ。助右衛門鼻をしかめ、「旦那是御らんなされ。おまへの印判盗出し、白紙におす曲者、大經師の家をくつ返し、主を賣らふもしれぬやつ。請人に預けてのくゝしあげて」とひしめけば、おさん親子ははつと計り肝にこたへ胸にしみ、色ちがへする計なり。以春大きに驚き、「扨々日比程にもない見ちがへた根性。惣じて所帶がたあきなひ事、二人にまかせ置からは、事によつて主の印判、おすまひ物ではなけれ共、助右衛門にも知らさぬは私欲有に極つた。どふした心で印判ぬすんだ。助右衛門それいはせて聞や」助「エヽなまぬるい旦那殿」と、たぶさを取て

さどいがら―梁螺殿にて撃骨をいふ

おぢ様―後にある梅鶴

さどいがら、二三十くらはせ、「サァぬかさぬか」と睨めつくる。茂兵衛髪も解きむしられ、茂ヲヽまだぶて〳〵、ふんでくれ。主の印判ぬすむとは、だいそれた此茂兵衛、去ながら今日迄茶屋の見世へ腰かけず、かるたの打様存ぜず。人なみに著がへは持、足手まとひの妻子はなし。何を不足に私欲をせう。からだは粉にはたかれても、茂兵衛が口から云わけせぬ。おさん様お袋様、詫言云などあそばしたら、未來迄のお恨。ヤイ助右衛門、天道が物をおつしやれば、おのれがつらをぶち返し、ゆるして下され茂兵衛様、とおがませいで無念なわい。くちおしいわ」と齒ぎしみし、顔をかたむけ泣ゐたり。以春もさすがなじみの下人、「いか様二十年見落しもない奴が、俄に惡心有筈なし。云わけせい〳〵」と、いへ共さらに返答せず。中居の玉はかねてより、茂兵衛に心をかけ、命も捨んと思ひこむ、心ざしをや顯しけん。主人の前に手をついて、「是は皆私が頼みし事、茂兵衛殿に科はなし。岡崎にゐられますわたしがおぢ様、牢人のいとなみにくらしかね、五百目餘りの借錢にこひつめられ、腹を切との便あんまり悲しさ、あのお人を頼まし、銀才覺してもらひます。じひ心あまつて身の難義、まつぴら御免成ませ」と、誠しやかにいひければ、おさん親子は幸と、「玉出來しやつた。有様によふいやつた。

人の爲の仕損―人の爲を思うて茂兵衛は仕損じたり

露云々―露の玉に次の涙きも涙茶の意を含むつゝぼりー茫然と

人のためのしぞこなひ、殊に大事の祝日、つれそふ女房姑が一生の詫言、ゆるしてやつて下され」と、手を合せても合點せず。以春彌腹を立、「扨はうぬらは密通か。此大經師は禁中のお役人、侍同事の町人。不義のうへに主の印判盗出す大罪、けふは早日もくれる、あす請人を呼よせ、段々せんさくする事有。ヤイ男共、隣の明屋の二階へぼひ上下に急度番をせい。油斷するな」といひつくる。おさん親子は有やうに、いふてよかろかわるかろか、心定めぬうき草の、茂兵衛は下々にひつ立られて、わるびれぬ性根たゞしく哀なり。男女共もさびしからん、お袋こよひはお泊なされ。舅殿の氣色見廻がてら、我等下立賣へ參つて、萬事つぶさに咄ませう。それ女房共頭巾おこしや。是助右衛門、戻りは定て夜がふけう、皆早ふ寢ませ、門もしめて火の用心。傳吉挑灯七介こい。隣の明屋に氣を付よ」と、いひ付表に出ければ、助右衛門は方々の、かけがねしめて部屋に入、臺所には有明の、四角行燈六角堂の、鐘こう〳〵と三重ふくる夜や　おさんは母御をねいらせて、心もしめるねまきの露、玉が常の寢所の、蒲團も薄き茶の間の角、四尺屏風を押のくれば、玉はねもせず寢所に、貝つゝぼりと起るたり。玉ハアこれはおさんさま、御用が有ならおねまから、お手をならしはなされず、見ぐるしい寢所へ何の御用

でござります」さん「ムウそなたもまだねやらぬの。別に用はなけれ共、茂兵衛の難に逢つたは、皆此さんが頼んだ事。それをどふして知つてやら、岡崎の伯父にかこ付、我身の上に取なし、いひ分してたもつた心ざし、あんまり〳〵嬉しうて、禮いひに來たわいの。さきの世の姉か妹か、死んでも恩は忘れはせぬ」と、はら〳〵涙をこぼしける。玉「是がまあ勿躰ない、お禮うけう覺へもなく、おまへのお頼みなされたやら、どふしたわけやら存ぜね共、さつきの樣に申せしは、わたしが心有ての事」さん「いや〳〵わけをしらずには、そばから出ていひわけしやる筈がない」玉「御尤々々、御不審の立はづ。そんなら懺悔いたしましよ。地躰わたしがあの人に、骨身に染で惚まして、二年此かたくどけ共、器量に似合ぬこうとうな、かたくろしい偏屈な生れ付、奉公の内いかな事、女ごの手をも握らぬの、女ごの顔は明た目で、みる事もいやじやの、と愛想つかしばつかりで、やさしい詞もかけられず。エヽ聞えぬきらはれたにくい〳〵と思ふやさき、さつきの難義見やつたの。玉がばちがあたつた、よい氣味とは思ひしが、いや、そうでない。恨といふもこひからおこつたにくしみ。戀こそは叶はず共、惚たは定よ。爰で心底見せいではと、我身を捨た此玉を、まだ不便共思やるまい、とほんに恨めしうござんする。そ

こうとうな―公道な、ものをしらぬ
花やかならぬ
義(俚言集覽)
見やつたの―それ見たか

れにまあおさんさまの前なれど、さもしいきたない、卑怯至極な旦那樣のお心。茂兵衛殿へのあたりは、皆慳氣から起つた事。わたしにきつうほれたとて、すきさへあれば抱ついたり袖ひいたり、隙を取て爰を出よ、餘所にそつとかこふて、在所の親もやしなはふ、小袖やらふ銀やらふ。うるさやいやや、聞共ない事ばつかり。わたしが身さへ淸ければ、御夫婦いさかひさせまいと、今ならでは申ませぬ、餘所の夜咄しにわざと夜をふかして、表の男部屋の二階から、此やねづたひに、あれあの引窓の、繩を傳ふて、わたしが此ね所へ、大かた毎夜さござんする。あんまりで腹は立、見かぎりはてた旦那殿、しつかい盗人の行義か。おさん樣へ知らせまし、町中へもことはつて、でんどで恥をかかせます。必恨さつしやるな、と此女ごにしかられて、すご〳〵と我家の中、戸を内からたゝいて、戻つたぞよ〳〵と、おねまへござる後付、おかしいやら憎いやら、かゝつた事ではござんせぬ。所にわたしが茂兵衛殿の肩を持たゆへ、扨は二人が密通か。禁中の御役をして、侍同前の大經師が家で、不義者めとのにくしみは、慳氣の當り丁度割符が合ました。今夜も慥に忍ばつしやるは知れた事。今宵こそ聲立て、おまへに告うと覺悟を極め、帶も解かずに此通り。おまへも嘸お腹立、いかに家來なればとて、侮づつ

行義―仕儀
でんど―人中
割符―前後の事柄の符合する事

まぶつて—守つて

井筒の女—提子の水は湯となれどまださめやらぬ我思といふ樂平が高安通の唄歌を引く

た惚様じや、と思へば腹が立ます」と、涙をながし語りける。おさん溜息横手を打、「扨も扨も今の世の賢女とはそなたの事。男畜生とはつれあひ以春殿。女房ひとりまぶつてゐる男とてはなけれ共、あんまり女房をあほうにした踏付た仕方、涙がこぼれて腹が立。なふ此うへに無心が有。そなたとおれと代つて、爰におれをねさせてたも。いつもの格で以春殿がござるとき、泣つ恨つくどかせ、今宵は玉のなびきやる顔で、夜のあくる迄だいてねて、内との者の見るまへ、幸母様宿つてなり、いき恥かゝせて本望とけたい。そなたのねまきのおひゑもかして、寢替はつてたもらぬか」玉「それはおやすい事なれど、召付ぬ木綿夜著、お肌が冷へてたまるまい」さん「エイなんのいの。昔の井筒の女とやらは、妬のほむらに鍠の水が湯となつた。男の恨に身が燃へて、寒さ冷たさ獣はぬ、ひらに頼む」玉「そんならばともかくも、隨分ぬからしやんすな」と、名を引つゝむ此屏風、火を吹消して烏羽玉の、玉は奥にぞ入にける。科なき科に埋もれし、茂兵衛はつくゞくと、思へば玉が心ざし、日比つれなき此男を、女心に恨もせず、仇を恩成詞の情、恥しし共面目なし。たとへ此まゝ死する共、一生に一度肌觸れて、玉が思ひを晴させ、情の恩を送らんと、目計出すふか頭巾、明屋の二階忍び出、おもやの屋根を四つばいの、姿を

人にとがめられ、又此上に盗人と、名をやうづまん柿ぶき、きのふの雨のかはかぬに、今宵の霧の淺じめり、足のふみどもうはすべり、そろり〳〵と引窓の、下を睨ばとこやみに、何のしやうどは見へね共、家の勝手は覺へたる、それを心の力なは、たぐる心も細引と、共にきれ行心地なり。足音餘所に知られじと、柱をさすり壁をなで、目は明ながら盲目の、杖を失ふ如くにて、敷居を一つ二つ越、三つ暦の細工所の、次の茶の間に玉が寢る。疊はいづく摺足の、屏風にはたと行當り、びつくりしたる膝慄ひ、おさんもはつと胸さはぎ、身もふるはるょ空ね入。屏風そろ〳〵押やりて、よぎにひつしと抱き付、ゆりおこしゆり起し、ゆり起されて驚きの、今目の覺し風情にて、頭をなづれば縮緬頭巾。さん「サア是こそ」とうなづけば、男はけふの一祓の、聲を立ねば詞なく、手先に物をいわせては、ふしおがみ〳〵、心のたけを泣く涙、顔にはら〳〵落かょる、其手を取て引よせて、肌と肌とは合ひながら、心へだたる屏風の中、縁の始は身のうへの仇の始と成にける。既に五更の八聲の鳥、門の戸はげしくとん〳〵〳〵、「旦那お歸り」はつときへ入寢所に、汗は淵水を湛へたり。「やい〳〵戻つた明やい」と、よばはるは以春の聲。助右衞門めをさまし、「どいつらも大ぶせり」と、提て出たる行燈の光、顔を見

睨―覗か
とこやみ―常闇
しやうど―あてど
大ぶせり―大怨入り

合すよぎの内、「ャァおさん樣か」「茂兵衛かはあはあょ」三匝

しょげ鳥—萎れ居る鳥
とりぶき—日光そぎ甲州でぎにて葺く屋根（滑稽笑覽）
太平記講釋—赤松貫龍軒といふ者堺町にて太平記理盡抄を講ず（近代世事談）
いかい兵—大きな勇士
つこど聲—尖り聲

中之卷

京ぢかき、岡崎村に分限者の、下屋敷をば兩隣、中に挾るしょげ鳥の、牢人の巢のとりぶきやね、見るかげほそき釣行燈、太平記講尺赤松梅龍としるせしは、玉がためには伯父ながら、奉公の請に立、他人むきにて暮しけり。講尺果つれは聞手の老若、出家まじりに立歸る。「なんと聞事な講尺、五錢づつにはやすい物。あの梅龍ももう七十でも有ふが、一理窟有顏付、ァゝよい辯舌、楠湊川合戰面白いどう中、仕方で講尺やられた所、本の和田の新發意を見る樣な、いかひ兵でござつたの。いづれも明晩々々」と、散々にこそ別れけれ。大經師助右衛門襲をさきに押立、「梅龍宿においやるか」と、あけんとすれば、門の戸ははやしめたり。助「ハテ門しめたしめぬとて、盗人に取らるょ物も有まいが」と、わるょ計に戸をたょく。梅龍内よりつこど聲、「かしましい何者じや。此の家に聟はない。講尺なら明日來いく」助「ィャ講尺聞たふない。大經師以春手代助右衛門じや。急に逢ねば叶はぬ」と、しきりにたょけば無せわしない。あくる間も有

物」と、によつと出たる糟尾の兀僧、紙子の廣袖革柄の大脇指、塩「ヤア助右殿、夜中にけわしい、なんの用でござる」といへば、助「何の用とはおさめ過た。此中毎日人を越、そなたが請に立た玉が事に付、用が有といへ共、酢のこんにやくのと我がまゝいふて、顔出しもせぬ請人が、どこの國に有事。此月朔日あくれば二日の曉、旦那外より歸りの門口、すりちがふて手代の茂兵衛めが、内義おさん女郎をそゝのかし走出、「やれ〳〵」といふ内に行衛がしれぬ。内を詮義すれば、玉めが寢所におさんじよろと茂兵衛めがねた躰にて、玉めはおさんの寢間に入かはつてねてゐた。しかれば主人の内義の、間男の中立した玉めなれば、同罪はのがれぬ。おさん茂兵衛を尋出す迄、請人といひ内證は伯父姪じやげな。そなたに急度預に來た。ふたりの者がはり付なれば玉は獄門。慥預た。そりやかご入」と、舁込所を梅龍棒はなつかんで、二三間押戻し「是お手代、此赤松梅龍が姪などを、むざと前垂奉公などに出す物ではおりない。二親もないやつ、漸〳〵伯父が太平記の講尺、暮六つから四つ時分迄、口をたゝいて一人に五錢づゝ、十人で五十錢の席料をもつて露命をつなぐ、すらう人の伯父が力には、絹氣をひつぱらせて腰本奉公に出す事もならぬ。大經師の家は常の町人とはちがひ、國王大臣も一年の鏡となさるゝ曆

糟尾―半白なる頭の中禿げたる（盛衰記）
けはしい―八釜しい
おさめ云々―落著過ぎた
酢の蒟蒻―何のかの
もりない―恥座

鉢坊主―托鉢僧が乞ひ歩く米糧の少額

安東入道―義貞が妻の伯父、兵敗れて自殺せんとする時義貞の妻諫めしを大に怒りて毀破したり

頼んだ―あさんを世話せよとたのむ

の商買、日月のめぐりを明かにしるす物なれば、ひつきやう月日に奉公さすると觀念して、大經師御手代衆參る、奉公人たま〳〵請人赤松梅龍と判をすへたは、姪が不便なればこそ。國元では人なみに武士のまねをして、鉢坊主の手の内程、米も取た此梅龍、預ケ者には請取渡しの作法が有。此家わづか三間にたらぬ小借屋、めぐりにほそ溝ほるやほらず、薄壁一重ぬつたれ共、身が爲の千早の城廓、六波羅の六萬騎にも、落されまいと思ふ所に、どこへ見ぐるしい駕舁が泥臑。サア改て渡せ」と、辯舌は講尺、事の道理は太平記、かたちは安東入道が、理窟をこねるもかくやらん。助「あた子細らしい威しだて、おいてもらを。武士でもで侍も此助右衛門はなん共ない。あらためて請とれ」とかご打明、高手小手のしばりなは、ひつ立て引出す。玉は涙に目も顔も、水より出たる如くにて、「伯父樣面目もござらぬ」と、わつと叫びし顔を見て、鬼の樣成梅龍も、涙を咽につまらせて、齒噛をなすぞ道理成。玉は恨の身をふるはし、玉「是助右衛門、物には了簡品も有。おさんさま茂兵衛殿、一所にのいての上なれば、間男でないといふ云わけはなけれ共、かう成下つた始りは、以春樣の悪性と、そなたの心の佞人から、おさん樣に惚た間男といふはそなたじや。腰本のかやをだまして、何やかやとらせて頼んだを知つて

ふんばり—女を罵る詞、丹波與作にもあり
盆の凹—項
本縄—公に罪人を縛る仕方
かた息—肩で息する程

ゐる。もういをふ〳〵と思ふたれど、いや〳〵人のそこねる事。とかくおさん樣に疵さへつけねばよいと思ふて、此玉が急度目になつて、おさんさまのそばを一寸も離れぬ樣にしたによつて、かやめもいひ出す折がなかつたやら、わしをけぶたそうにして、そなたの文を燒いて捨おつたも見てゐる。それを妬に思ふて、針を棒に取なして、此樣にしなした。おのれを磔にかけ、かやめがまづ此樣に縛られ、獄門にかゝる奴なれど、此玉が慈悲心ひとつで助かつた。此比是をいはふとすれば、いひけし〳〵人でなしめ、じひが仇になつたか」と、かつぱとふして泣ければ、助「ふんばりめ血迷ふて何ぬかす。請人慥に預ケた」といひ捨て立歸る。梅龍とびかゝり、盆のくぼ引つかんで引あぐれば、足をつま立　助「是なんとする」聟「何とするとはしばるさへ有に、町人の分でなぜ本縄に縛つた。急度訴へて處刑にする奴なれど、御免なれとぬかして解きおるか〳〵」としめつくる。助「あいたゝ、只の町人と違ふて、禁中のお役をすれば、本縄にかけても大じない。解いてほしくばそつちで解」聟「ヤアうぬめは縄付て預るさへ、昔からない作法に、禁中の御用を聞町人は、本縄かけても大事ないとは、どこから出た諚じや。上をかろしめた慮外者、どふしても大事ない」と、かごの棒引ぬいて、力に任せ七つ八つ、かた息

おとがひ云々―口を叩く

金神―此神の方角に居れば災あり　ほうだゝり―方角塞り　どよむ―土用の音をとれり、うづく　おされぬ―孕はれぬ　ひだけ孕―亂れ孕、おさんが此もつれを解くに苦心する事　かれて―金にかく

に成程ぶちのめされ、助「おのれ助右衛門をぶつたぞよ」梅「ヲヽぶつた、身がぶつたがあやまりか、町人の分で本なはかけたがあやまりか、御さばき所で埒あけう。サァうせう」とひつたつれば、助「そんなら待おれ、解いてくりよ」梅「ヲヽとかせいでおかふか、まひとつ棒をくらふか」と、きめ付られてふしやう〳〵になはひつぽどき、助こりや堪に預けた。所の庄屋にもことはつて歸るぞ。一寸でも取りにがしたら、請人共に首がとぶが合點か」梅「まだおとがひを聞おるか」と、ほうげた三つ四つくらはせて、玉が手を引内に入れ、かけがねはたとしめにけり。かごの者共笑止がり、「今のはいかふ痛ませう。かごでお歸りなされ」といへば、助右衛門顏をかゝへ、「此はづく。今年は爰が金神に當つた。それで是ほうたゝより、殊にけふは土用の入、それでか跡がきつうどよむ。暦の事はおされぬ」と、減ず口して歸りけり。むすぼれて、なまなかつらきみだけ孕の、おさん茂兵衛は夢にだに、戀せぬ中の戀と成、つれて走し其日しも、茂兵衛がはだの紙入に、たつた三歩のかねてより　思ひもあへぬ旅の道、おさんの肌著代なして、白むく一重兼房に、裾模樣有蘆に鷺、あしに任せて奈良堺、大津伏見をうかく〳〵と、夫婦にあらぬ夫婦のさま、神佛にも人間にも、うとまれはてし身の上やと、たがひの心恥しく、顏打あけて

兼房云々―黑茶色の著物に鷺に蘆の模様あり

顔と顔見合せ、顔をあかめては涙の外に詞なし。さん「なふ茂兵衛殿、とてもわしらは今日あつてあすない身、命を命と思はね共、いとしや玉はどうなりやつたと、案ずるは是ばかり。只ゆかしいは父様母様、なんぼ思ひあきらめても、あひたふござる」とむせ返り、歩みかねて泣ければ、茂「ヲヽあひたいはお道理。我とてもおめかけられしお主筋、お名殘おしさは同前。爰が彼玉が在所岡崎、あれあの行燈の出た所が則伯父の宿。是にたよつてお里の便宜玉が噂も、聞ふと存じ參りしが、内の首尾を聞合せず、案内するも麁相也」と、軒に立寄うかゞへば、内には玉が泣聲の、わけも聞えずくどき事。伯父梅龍が聲として「ヤイ玉、此本は是伯父が毎夜講尺する、太平記二十一卷目、尊氏將軍の執權、高の師直といふ大名鹽冶判官といふ、これも歴々の武士の妻に心をかけ、末代迄惡名を殘し、鹽冶判官もそれゆへ命を失ふたは、もと侍從といふ女が中立からおこつた事。おさん殿と茂兵衛と、眞實の間男でないに極つても、ふたりつれて欠落めさつたは定よ。此二人にいづ方であふたり共、萬一爰え尋てござつた共、必ず〳〵物いふな、見ぬ顔せい。かういへばつれない水くさい樣なれどそうでない。ま男といふうき名のたつた二人の中へ、中立といはるゝ其方と三人よつた、そぶり成共人に見られては、そりや

定よ―尋ぬべかりず

一つ穴云々―同じ仲間、惡い方にいふ

身は―俺は

かち―徒歩

一つ穴のいたづら狐、一所によつたは、扨こそ玉が中立で、おさん茂兵衛が不義は極つた、といひ立られては彌科がおもふ成。爰をよふ合點せい。つれなふあたるはおためじやぞ。此事ゆへにそちもなはめの恥にあひ、此如く預られた。しかれば同罪はのがれがたい。首を切られ手足をもがれ、ためし物に成とても、主と頼んだ人ゆへ、命おしむな梅龍が姪じやぞ。最後を潔う死んでくれ」と、聞ゆれば玉が聲、「それは氣遣さしやんすな。とうから覺悟極めてゐる。伯父ひとり姪ひとり、わしが死んだら伯父樣の、さぞ便なふおほしめそ。茂兵衛殿はどうしてぞ。いとしいはおさん樣、どこにどうしてござるやら。常がはかない正直な、心しつた私なれば、何かに思ひやります」と、泣入れば梅龍も、「ヲヽそちがいとしいはおさん殿。身は下立賣の親御達の、歎が思ひやらるゝ」と、内に伯父姪くどき泣、外に二人が立聞て、涙をもらす戸のすきま、聲なき冬のきりぐ〳〵す、壁にすがりて泣ゐたり。血筋がむすぶ親子の契り、おさんの親道順夫婦、娘の浮名かくれなく、命がつらき老後の恥、人に面もあはされず、月出ぬさきの心の闇、黑谷の菩提所へ、かちの夜道の夫婦連、小孺がさけし風呂敷や、つゝむ涙にとぼ〳〵と、行過る軒の下、二人しく〳〵泣聲の、耳にとまれば立とまり、道おばゝあれ合點のいかぬ何

者やら」と、うとき老眼すかして見る。行燈の影に茂兵衞見付、「あれおさん樣、下立賣のおやぢ樣」さん「ナフ父さまかいの」と走寄、取付所をついとのき、父「ヤイ畜生にとつ樣と、云はるゝ覺えはないわいや」と、わつとなく〳〵ふりあげて、うたんともがく杖の下、母はあこがれ火を吹消し、娘を袖におしかこひ、母「なふおやぢどの、おさんめは逃ました。もうこらへて下され」と、影をかくすは母の慈悲、打杖は父の慈悲、心かはると子や思ふ、哀はおなじ涙の闇、まよひのうへの迷ひなり。道順不覺の涙にくれ、「道順が未來もはやしれた。ひとり娘の事なれば、聟を取て家を繼する筈なれど、近年諸國の銀もすまず　家屋敷をも人手に預ける逼塞の身。此跡を娘に渡し、苦勞させる可愛さに、一代切に家を捨、嫁入させた親心、さきとてもその合點道順が娘ならば、拵いらぬみやげもいらぬ、そだてた親に見こみが有、娘の心が土產じや　としたはれた根性に、ちく生の魂が、いつのまに入りかはつた。うらめしや情なや、池にすむ鴛や鴛を見よ。軒に巢をくむ燕も雌一羽雄一羽、女夫つがひは生ある物のならひぞや。父親さま〳〵の毛色をうむは、犬猫ならでどこに有。親は犬には生付ぬ、猫になれとはたが育てた。畜生に對して詞は交さぬ。是は我ひとり言、とてもかう成からは山の奥にも身をかくし、の

諸國の云々―國々のかけ先の金も集まらず

したはれた根性―慕はれたる娘の心に也

がるゝだけはのがれもせず、京近邊をうろたへ　今のまに召捕られ、洛中を引渡され、親が大事に生付て、撫で育てた體を、鎗で突れて死にたいか、からだにも恥が搔きたいか。生うが死ふが此道順は、悲しい共思はねば、涙一滴こぼれねど、ばゝのなきやるが悲しい」と、わつと計にこらへかね、余所をも恥ず大聲あげ、めをとは老の息切に、むせ返りてぞなけかるゝ。茂兵衛はひれふして、とかふの詞なく計。おさんは母に抱き付、さん「ふたりに不義のあやまりは、みぢん程もなけれ共、ほんの因果のまはりあひ、云わけたゝぬ品と成、京洛中に畜生の名をながし、罰のあたつた此上に、誓文立てん様もなし。とつ様のお腹立、かゝさまのお恨も、私可愛ひ上なれば　來世をかけて形見の詞、我々は天の網、とても遁れぬ命の内、親達に逢からは、木の空にさらされて、かばねを鎗でつかれても、思ひ置事ござらぬ」と、くどき歎けば　爻「未ぬかす。其鎗でつかせまひ、木の空へあげまいと、思ふてむねをこがすはや」と、又たへ入て泣沈む。母は涙の數珠袋、ふくさ物取出し、母「是一歩二つ白銀もすこし有。いとしやいかふ肌うすな、路錢に盡きて脫ぎやつたの。是を茂兵衛に渡して、駕に乘て京の地を、一足も早ふ立ちのいて、必必悲しい事、聞せて泣せてたもんな」と、泣々わたせばおしいたどき、さん「忝な

品―事情
木の空―磔

ふござんする。中に著た淺黄縮緬は、奈良の町でうりはなし、此うへに著た蘆に鷺、此秋おまへの下されて、未來迄もかゝ様の、形見と思ふて著ますれば、寒い共覺えず。見付らるゝをそれぎりの、命の内は袖乞でも、賴ないは後生の事、これはそのまゝ留置て、死んでの跡の弔ひに」と、歎けば母も「アヽ悲し。また死用意ばかりを」と、つきぬ涙の露霜の、白きを見れば夜も更て、出たる月は冴へながら、親子の袖ぞ時雨ける。茂兵衛は搔くれて物をもいはずゐたりしが、「我ら男のつらをさけ、斯様のわざを仕出し、のめ〳〵ながらへ有事も、おさん様のお命を、何とぞと存ずるゆへ　お宿もとへおさん様を御同道なされ、御命助け下されば、科を私ひとりに受、物の見事に死ましたい。御了簡賴上ます」と　手を合せ泣ければ、さん「アヽおろかしい事いふ人じや。我一人生ながらへ、いひわけが立程なれば、ふたりいきても同じ事。取違ゐうがどふしやうが、以春といふ男持ちながら、そなたと肌ふれ寢たは定。かたちは生れ替つても、此惡名は削られぬ。そなたはいかふうろたへが來たそうな」と、恥しめられて茂兵衛も、「アッそうじや。ハアあれ三條通の車の音、夜明といふて程もない。行先あてどはなけれ共私在所、丹波の栢原迄落て見る計。サア暇乞なされませ」と、いへ共親子一生の、生死をあらそふ

袖乞云々―乞食でもするが―

のめ〳〵―おめおめと

取違へうが―假令夫と取違ったにしても

今はの別れ、月出ぬ先は顔見えず。いつそ思ひ切べきに、見かはす顔は見きられず。なまなか月もうらめしく、母はもだへて「是おやじ殿。脈のあがつた死に病も若やと藥はもつて見る。天にも地にもたつた一人の大事の娘、見付らるゝと殺さるゝ、手ばなしてやられうか。ござれ爺媼つきそふて、しなば親子一時に」と、氣も狂亂のくどきごと。道順も堪へ兼て、「それはおしやる迄もない。いか成大病難病でも、藥一味の加減にて、助かるも有ならひ。息の絶た死人でも、二十四時は待つて見る。唐天竺日本國の名醫の以を浴せても、天下の法をそむくといふ、大病には叶はぬぞや。たつた一つの頼みには、藥春の方へ手を入て、心をなだめ見る計。もし其内召抑れ、すは最後といふ時は、白髪あたまを大地の底へすり付て、命乞も身がはりも、願ふといふは其時よ。なまじい親がかくまふと、聞えてはさきに我が立て、免したふても免されぬ。親下人にも見はなされ、憂目をすると聞えては、げには先にあはれみ有。ヤイおさん、畜生よ犬猫よと叱るとて恨むるな。願かけぬ神もなく、祈らずといふ佛もなく、三光天を拜むとて、七十に成道順が、朝毎垢離を取時は、惣身の骨はこほれ共、娘が處刑にあふならば、此くるしみを百千萬、かさねても物の數かは、とこらへて月日を拜するは、あの月天子の照覽有、利

さきに我が立―先方で意地になる

三光天―日月星の三天

垢離―水にて身體を淨め祈願する

無下――ないがしろ

生は無下にはよも成まい。茂兵衛たのむ頼すな。是爰に銀子一貫目、家質の利足のたし銀に、黒谷の和尚様より借つたれ共、世間張つて何にせん。家を町へつき出し、寺へ返す此銀、遣るといふてはやられぬ、貰ふといふてはもらはれまい。道順が涙にくれうろたへて落いたぞ。落た物はひろい徳、罰があたれば落した者、ひろふた者に罰はない。おばどおじや歸らふ」と、夫婦せきあげむせび入、二あし三足立されば、おさん茂兵衛はわつと泣、銀取上て額に當、さん「あんまり深い親の慈悲、返つて冥加が恐ろしい。なふとつ様かゝ様」と呼かへせばふり返り、爻「何にも云な何にもいふな。さらば〳〵」の泣別れ、父が歸れば母がとめ、母が歸れば父がとめ、おさん茂兵衛は歩みかね、名殘おしさに立どまり、小高き土手に延上り、二人見送る影法師、賤が軒端の物ほしの、柱二本に月影の、壁にあり〳〵うつりしは、うき身の果は捕はれて、罪科遁れぬ天の告、母は驚き「なふぢい様、情なや爰に磔が」爻「悲しやおばゝ、おさん茂兵衛が影法師、天道の力にも叶ふまいとのしらせか」と、又絶かねて泣聲に、内より玉はくどり戸明、顔指出す其影の、同じく壁にうつりけり。「あれ又爰に獄門が」淺ましや此首の、其名は誰と白露の、「玉ではないか」玉「おさん様」さらば〳〵の聲の中　はや黒谷の後夜の鐘生滅々

爰に磔――柱頭に二人の影の映りしを見ていへり

絶かねて――堪へかねて

後夜云々――夜中には生滅々已と

響き晨鐘には寂滅爲樂と響く

と響き來る、果は寂滅爲樂ぞと、名殘悲しき 三重

したん〳〵―水音にぽん〳〵と鼓の音を彼けたり、遥はおさん茂兵衛が宿原に懸居の所へ萬歳が來りしなりありきやう―京本のまゝ憂婚かありのの帝―太上皇日のもく云々―他の歌には日の本内裏とあり浦安云々―日本の事

やしよめ―やさ女の意なれども型に拍子に用ひたり

下之巻

春たつと、去年の雪げを其まゝに、霞むも山の奥丹波、軒のつらゝも解渡り、谷の水音したん〳〵、ぽん〳〵〳〵となる鼓、[萬歳]德若に御萬歳と、御代も榮へましますありきやう有あら玉や、年立返るあしたより、水もわかやぎ木の芽もさし榮ゑけるは、誠にめでたふ候し。京のつかさは關白殿、おりゐのみかど日のもくだいり。王は十善神は九ぜん、よろづやす〳〵、浦やすが木のもとにて、正月三日の寅の一天、誕生ましまず、若ゑびすあきなひ神と、顯れ給ひて、商なひ繁昌護らせ給ふは、誠にめでたふ候ける。やしよめやしよめ、京の町のやしよめ、うつたる物はやしよめ、うつたる物は何ゝ 大鯛小鯛鰤の大魚鮑さゞい、はまぐりこ〳〵、はまぐりこうと、うつたるものはやしよめ 京の町のやしよめ、そこをば打過、そばの棚見たりや、そばの棚見たりや、豆に小豆、大根蕪、加賀の牛蒡毛牛蒡、からしの粉山椒の粉、辛い胡椒めさいの。やしよめ〳〵、京の町のやしよめと、賣りためて千貫、繋ぎたてゝ萬貫、惠方の御藏づつしり、納て家も

めさいの—食し玉へ
づつしり—澤山
ほくん—敷の音
つがもない—途方もない

福々、ぢい樣ばゝさまとゝ樣かゝ樣、わこ樣ひめごぜ、產ならべてふく〳〵ふく〳〵」ほゝんほんとぞはやしける。さん「ヲヽめでたい〳〵、よふ祝やつた。とゝ樣かゝさま御無事な萬歲祝ひましよ」猶御壽命は百包、盆に入てさし出す、おさんの顏を不思議そうに、萬「ハア是は奧樣、お久しうござりまする。御きげんよふ、かはつた所で、正月をなされまする」さん「アヽつがもない、わしは萬歲に近付はないわいの」萬「なんの私らを見覺へはなされますまい。毎年お庭で舞まして、おまへはおうへに結構な蒲團敷いて、腰本衆づらりと竝べて、御見物なされました京烏丸大經師のおく樣、よふ覺ておりまする。田植が御すきでござりました。なんと一つ舞ひましよか」と、いへばおさん胸轟き、さん「目角の强ひ人じやの。毎年の事でもこちはすきと覺えぬ。必々いづかたでも沙汰してたもんな。わしが里の父樣、此所へ去年から逼塞してござるゆへ、此比漸見廻に來た。此在所でわしは島原の傾城が、請出されて來てゐると、庄屋にも誰にもいふて置。若し人がとふたり共、島原で見た女郎じやといふてたも。少樣子も有ほどに、京ではなを沙汰なし、賴むぞや〳〵。さらばまちつと祝はふ」と、錢ざしぬいて五六十、半紙二枚にもらすなと、わが名を包めば惜からず。萬「ハアかさね〳〵おめでたい。二三日中に京へ

めかど—目利
すきと—とんと

出まする。烏丸へも參り、御嘉例の如くお手代衆、助右衞門樣茂兵衞樣とおさかづき致ましよ。御ぶじな通り話しましよ」と、出んとすれば、さん「なふ是々、その烏丸で猶かくしたい。アヽ酒に醉ふたら忘れて、ひよつと云やればわるい。此春はもう烏丸へはいかしやんな。來年めでたふわしがのぼつて祝ひましよ。烏丸の代に爰で盃出したいが、おりしも酒をきらした。是で呑んで下され」と、二三夊の豆板二つ、呑ませぬ樽の口ふさぎ。茂「ハアなんの是で申ませう。本の樽より結句木樽に醉ました」と、うまひめにあふ萬歳の、舌つゞみうつて出にける。おさんもうき世恐ろしく、うつかりと成所へ、茂兵衞も色青ふして立歸る。さん「エヽきり〳〵戻りはせず、此身に成て惠方參り所か。たつた今毎年京へ來る、得意の萬歳が來て、不思議立たを、につこらしう嘘ついて、いなせ事はいなせたが、どふやら爰にも怖氣が立て、長ふ居らりよと思はぬ」と、かたれば茂兵衞もあきれはて、茂「サア〳〵盆も正月も一時に來ました。天しる地しるでこつちこそ見しらね、今の萬歳の格で、栗賣の柴賣のと、丹波から京へ出る者は多し。あれが云ひ是が聞、知れたも不思議でござらぬ。助右衞門めを始旦那の一家が隣在所に宿取てゐるげな。其上たつた今但馬の湯入を乘せて通る鷲屋が、めいよな事を云ました。大經師

のませぬ云々―小粒銀二枚で口を留めるきり〳〵―早く

盆も正月―忙がしい事の譬

天知る云々―人の見ぬ所でも惡事は知れる譬

揚屋の故事めいよ―面代

解狀―罪人捕の狀
もたくまる―儲ける

のおさんが、おく丹波にかくれてゐる樣子がしれて、京のお役所から、爰の代官所へ解狀がついて、在々を尋る、其使の早駕を乘せて、おいの坂のおり口から、二里の間を一貫四百、七百づつあたゝまつたと、たつた今いふて通りました」と、身を慄はしていひければ、さん「ハテなんとしよう、今迄がふしぎの命。されば共とつ樣かゝさまの、歎の程がおいとしい。一日でもながらへるが孝行、今夜のうちに退かふでは有まいか」茂「いかにもいかにもかのお心ざしの一貫目二百目つかふて、殘る八百目此家ぬし助作に預置ました。大事のお慈悲の此銀を、こなたとわたしが急度抱へて死ねばとて、人の寶になす事は、冥加に盡ると思ひ、今寄つて申たれば、追付持ていかふと申。此銀を腰に付、丹後の宮津に兄弟同前の者が有。そこ迄どふぞのきませう。それ迄に運つきて、死ぬる期に極つたらば、日比申通り、惡緣と思ふて下されませ。私ゆへに大事のお身を捨させました」と、涙ぐみ打しほれて兄へければ、さん「又おなじ事計。それは互の因果づく。只わすれぬは二人の親。扨いとしいは幼馴染の以春樣、こなたもわしも微塵濁らぬ此心、いひわけして死たい」と、又さめ〴〵とぞ泣ゐたる。家主の助作、案内もせずつゝと入、「ヤア新六樣、さつきは御出なされた、預りの八百目只置よりはと、少し手まはし致し、

新六―茂兵衛のかゝ名

急にはどふも調はぬ、一兩日待てもらひましよ。こなさまもあんまりな、あの樣な傾城殿請出した上に、銀つかふといふ樣な、むかしの心お止なされ」と云ければ、さん「いや是助作さん、あのさんの入用ではないわいな。皆わしが入用じや。勤の身はな、全盛する程世間が張つて、辛い物でごんす。念比な客から借つた銀で、今宵中に返さねばわけが立ぬわいな。其代にあのさんの勘當がゆりて、大坂へ往んしたら、夜るでも夜中でもいふてごんせ。八百貫目や八千貫は、誓文くつされ、利なしでやんす」といひければ、茂「あの通り〳〵。近比御苦勞千萬ながら、どふぞ賴み存ずる」助「ム、いかにも聞とゞけた。それ程急なと知らなんだ。七つ過暮迄に急度持て來ませう。女夫の衆の請取とる、必内にござれや」夫蟹「ヲヽいごきもしませぬ」と約束堅き、銀が敵としらざりし、身のなるはてぞ淺ましき。茂「扨々とろりと一ばい參らせた。今の傾城の物眞似芝居御すきの一德。銀請とるとそのまゝかけ出して急いだら、夜の中に七八里は心やすい。宮津に落付、切戸の文珠の法印樣に母方の緣あれば、賴むに引はなされまい。そろ〳〵用意」と帶しなをし、身拵へする中に、かな棒の音、人足しきりに近付たり。茂「ヤア氣味わるひ。ハア南無三寶口惜い。助作めに出しぬかれた。おさん樣もう遁れぬ。未練なはた

ゆりて―許されて　誓文云々―誓文腐れにて誓つて利なしに貸すとの意

一ばい云々―うまく欺いた

合口一七首

是式の云々一是

らき遊ばすな」さん「ヲヽ、覺悟した合點じや」と、表を見れば取手の役人、助作を先に立て「とつた〳〵、とつた〳〵」とみだれ入。茂兵衛臆せずつゝと出「見苦しいお侍、合口一本さゝぬ町人、手向ひはいたさぬ。悴の時より柔術あて身を稽古して、すはといはど腕は細く共、お侍の五人や七人は慮外ながら、きやつといはせてのめらせ樣もしつたれ共、もとのおこりは主人の勘氣、主人に手向ふ同前と思ひ、手向は仕らぬ。此女中に付、申わけあれ共それもいらぬ物。不義ならば不義にして、サア尋常に括れ」皆「とつたとつた」と引伏せ〳〵高手小手、顏色變ぜずしばられし、男も女も健氣さに、取手の武士は我を折て、哀といはぬ人もなし。おさんすゞしき目の中にて、助作をはつたと睨み、「エ、さもしい土百姓、おのれ少シの欲にめでて、よふ訴人しおつたな。申殿樣あいつに八百目のかねを預ケ置ました。かうなつた身に金銀はいらね共、是は親のなさけの銀、京へのぼして黑谷へ上げて下されませ」と、いひもきらぬに助作まが〳〵しき顏付にて「ア、恐ろしい女め。いつおのれに粒三文もかつた覺えはない。五十日計家貸して、宿賃の米の味噌のと算用したらば、二三百目も來る筈じや。八百目預けたとはいきがたりめ」と、あらがふ所を茂兵衛なは取引立　助作が横腹はつたと蹴倒し、茂「是式のめくさり銀

位た些少の金、物惜みする者の所持金をさして目腐金といふ

おのれ風情に詐をいはふか。よい〳〵おのれにくれた。八百日の銀うぬが根性相應に現世は長者と悦んで、閻魔の前で算用せい」と、つらほね三つ四つ蹈付け〳〵、さらぬ顔にてゐたりけり。かくと聞より助右衛門嬉しげに走付、「私は此度お願ひ申あげし御領内助作がいとこ、京大經師以春手代助右衛門と申者。御苦勞千萬に、おさん茂兵衛御からめ下され、我々主從本望大悦仕る。繩付二人請取早々上り申たし。お渡しなされ下され」と、謹んで述べければ、役人氣色をかへ「そいつ引のけ。推參至極な繩付を渡せとは、おのれに頼まれ捕はせぬ。京都より解狀によつてからめ捕る、すぐに京のろう屋へ引渡す。殊にだん〳〵詮義有もの、慮外をぬかしたらおのれも共に、からめる」と叱られて助右衛門、もみ手をしてのく所へ赤松梅龍、早駕にて駈付、首桶提げつか〳〵と出、「われらは大經師以春が下女玉と申者の請人、すなはち伯父赤松梅龍と申もの。此度おさん茂兵衛駈落の事、ゆめ〳〵兩人の不義はなく、此玉がよしなきことばを聞ちがへ、嫉妬の心あまつて、間ちがひのあやまりにて、おもはず不義の虚名をとる事、せんずる所玉めが口からなすわざ。科人は一人、すなはち玉が首うつて參るからは、兩人の命御助け下さるべし」と、ふたをとれば玉が首、おさん茂兵衛は一目見て、「はや先だつ

たか、はかなや」と、きへ〳〵とこそ成にけれ。代官の役人手を打て、「ハアヽ早まられた梅龍。此兩人のめしうどは、科の實否定まらず、京都において中立の女、其玉を證據に詮議あらば、事の次第明かにあらはれ、兩三人共に助かる事も有べき物を、かんじんかなめ證據人の首をうつて、何を證據にせんぎ有べきしるべもなし。殘念々々二人の罪科極つたり。首も一所に京都へわたせ。早々罪人引ませい」（捕手）「うけ給はる」とひつ立れば、梅龍つゝ立ち地團太ふみ、「エヽ〳〵早まつた仕損じた。七十に及ぶ梅龍が出來しだてして一生のあやまり。むだ〳〵と腹切るもひとり物に狂ふに似たり。相手がなほしやなあ。ヤア助右衞門よい相手、己れを切て人を殺したあやまりと、共に罪科に行はれん」と、するり拔いて打付れば、まつかうをしてやられ、あけに成て逃たりけり。梅「首をとらずにおかふか」と、かけ出るを大勢取付、「狼藉させぬ粗忽させぬ」と抱とむる。梅「狼藉合點じや、はなせ〳〵」と、かけ出すもとまるは老の力にて、とまらぬものは科人を、引行く駒も目に涙　轡にかゝる白泡の、哀を殘す　三段

（捕手）足搦して口惜しがる

まつかう云々―額の眞中を斬られたり

道行乘合鞘

乘る人も乘たる駒も、つるに行、道とはしれど、最後日の今日か明日かの我身には、我のみきゆる心地して、あまたの人の命乞、それを杖共柱ごよみの紙やれて、向ふ其方は郡の惠方、二人が身には金神と、思ひ返せば胸塞り、月ふさがりの駒の足、隙行く駒の世のたとへ、八十八夜は及びなき、年は十九と廿五の、名殘の霜と見あぐれば、空にしられぬ露の雨、はら〳〵ほろ〳〵繩目に傳ひ、鞍壺に傳ふ涙の十方くれ、泣々引れ行く姿よそのの見るめも哀れなり。人目盗みてあらはれて、不義じやのなんの庚申、今日はあしたの甲子と、知らであふ夜の其むくひ、世上の口にうたはれて、合せて見ても合ぬ中、丸い苧桶に角の蓋、眞苧うみためて絢交て、今は我身の縛り繩、謗を受けん情なや。おさん茂兵衛にいふやうは、「よしなき女の恪氣ゆへ、何んの科なきそなた迄、あれ不義者とあやぶ日、終に命のほろぶ日、ゆどの始に身を清め、新枕せし姫始、かのきそ始引かへて、ひかるゝ駒のくらびらき、思へば天一天上の、五すい八せんま日もなし。只何事も坎日」と、聲も涙にかきくるゝ。茂兵衛やう〳〵顔をあけ、「こはおろか成おさん樣、火に入水に入事も、さだむ因果とあきらめて、せめて未來のくろ日を遁れ、二季の彼岸に到らんと、念じ給へや南無阿彌陀、なむ阿彌陀佛を帆にあげて、共に弘誓の船のりよ

逐にゆく云々―生物は凡て死ぬるものなれど今日明日とは知らざりしとなり（蟬平の歌）やれて―破れて　惠方―百事に福ある方角　金神―不吉の方角、以下暦に當てゝ惡中を述ぶ　十方くれ―途方にくれに掛く　甲子―昨日に　きを―間男に

あやふ日―危くさせたに掛く、此日は物事をするに危き日　姫始―正月二日　謗―供へる吉日　きそ始―着衣始、新年の初着　藏閉―鞍にかく、正月十一日始めて藏を閉く

天一天上—天一神の巡る方角は物を忌む天一天上の間は吉日也八専—壬子より癸亥迄雨降る節十二日を云ひ、其中四日を間日といふ除の日に掛く
坎日—堪忍にかく、他出を戒むる日
黒日—苦勞にかく
釜蓋—蓋を塞るによき日
ちいみ—血忌、結婚を忌む日
往亡日—逢ふに掛く
半夏生—假粧にかく
玉—魂にかく
凶會日—凶日、悔にかく

し。紅蓮の非戸ほり焦熱の、地獄の釜ぬりよしなや」と、急がぬ道をいつのまに、こゆる我身の死出の山、しでの田長の田がりよし。野べよりさきを見渡せば、過し冬至の冬枯の、木の間〳〵にちら〳〵と、ぬき身の鎗の恐しや。茂「あれでそなたの身をつくか」さん「是でそもじを殺かや」茂「ちいみも今はいつはり」と、二人は顔を打合せ、くどき焦れて泣涙、馬の尾がみや浸すらん。またさへ返る夕嵐、雪の松原此世から、かゝる苦艱に往亡日、島田亂れてはら〳〵、顔にはいつの半夏生、しばられし手の冷たさは、我身一つの寒の入、涙ぞゆびの爪取よし、袖に氷をむすびけり。つく〴〵物を案ずるに、茂「我は劒の金性の、刃にかゝる約束か」さん「わしは土性墓の土、何とて墓に埋まれず。茂「ついに木性の木の空に」さん「骸を曝し。名をさらし」なんど小歌につくられて、強き處刑にあはだぐち。蹴上の水に名を流す、おさん茂兵衛が新精靈、恥かしながら手向草、おなじ罪科の下女が名の、玉は冥途に通へ共、魂魄此世にとゞまつて、共に浮名は下す共、冥途は主從一所にて、娑婆で手馴し玉がわざ、無間の釜で茶を沸し、ゆきょの人の廻向請、我身の悟ひらく日。ア、歎くまじ今更に、何くよ〳〵と凶會日の、悔むもよしなり引よせて、むすべば露の命にて、とくればもとの道芝に、やがていのこや五里六

いのこ―玄猪にて十月上の亥の日、動くにかく

韋駄天―佛法守護の早く走る神

五逆―害父、害母、害羅漢、破僧、出佛身血

里、十しも過て是ぞ此、小川通は三途の川、籠の町さへ近付ば見物群集とりぐの、暦が噂くりかへす、思へばわしが嫁取よし、我が昔の元服よしの、日どりもよしや蔗に鱶、裾の模様も繪にうつし、筆につらねて末の世に、かたりつどけて三重聞及ぶ、道順夫婦群集の中をおしわけ〳〵、「おかせる罪が重ければ、又慈悲といふ名が重し。磔にも獄門にも、此爺媼を替りにたて、二人を助け下され。やれおさんかわいや」と、すがりつけば警固の者、「寄たら打」と追はらふ。黒谷の東岸和尚、衣の袖を捲り上げ、韋駄天の如く飛來り、「出家に棒をあてたらば、五ぎやくざい〳〵。サアおさん茂兵衛、此東岸和尚が助けた」と、持たる衣を打かけ〳〵、臂をはつて立給ふ。役人頭腹を立、「罪科極つたる囚人を助くるとは、上を輕しめたる御坊の仕方、叶はぬ〳〵。それ衣引剝げ」と、どつとよれば、和尚「アヽ是々、出家侍さりとは同前。助くるといふ義理は、三世に渡る衣の德、愚僧が念願相叶ひ、二人が命下さるれば、是現世を助かる衣の德、もし又罪に沈んでも、愚僧が弟子になすからは、未來を助かる衣の德、未來でも現世でも、救るといふ文字二つはなし。サアたすけた」とよばはる聲、諸人わつと感ずる聲、道順夫婦の悅びの、聲は竭せず萬年暦、むかしこよみ新暦、當年未の初暦、めでたくひらきはじめけ

る。